



家庭幼稚園のこと

東 喜代雄

狭山ひかり幼稚園は、東京・池袋から電車で五十分たらずのところにある。名産の「狭山茶」と、養蚕のため
の桑畑がひろがる武蔵野の、しかしこの頃は東京のベッ
ドタウンと化している住宅台地に、渾然として建ってい
る。

今から十年前になるが、その年は園で飼っていたかい
こが、三・五キログラムのマユをつくった。

稚蚕が五度の脱皮をくりかえして、マユをつくり、や

がて蛾になって一生を終るさまを見るのは、幼児にとつ
ても、わくわくするようなドラマらしい。その年は、マ
ユを熱湯で煮て真綿をとったり、坐繰りをやったりし
た。

ところが、今どき「坐繰り」（マユから生糸をとり出
す手回しの簡単な装置）のできる人などいない。ついに
地域の古老を招き、子どもたちの前で実演してもらっ
た。

頬はこけ、腰は曲がり、黒く深いしわに年齢を刻んだ老婆は、それでも手つきあざやかに生糸を繰っていた。

ところが、ひとりの幼児が何をおもったか急に、

「せんせい、それ何にすんの——？」

と老婆に向って質問したのである。老婆はしばしためらっていたが、やがてていねいにその質問を受けとめてくれた。

おそらく、生まれて初めて「せんせい」と呼ばれたのであろうし、これからもそんな呼ばれかたはしないかもしれない。しかし私は、そこに新しい幼稚園を見たのである。

なにもブランコや砂場があり、折り紙や保育室がなくとも、子どもの興味をゆさぶり、好奇心をかきたて、感動を呼びさます人ならだれでも、「教師」になりうるのではない。つまり幼児にとっては、彼らのいるところはどこでも日だまりも、縁がわも、電車の中も、いろいろばたも、野山も地域社会すべてが幼稚園といえるのではないかと思つたのである。

折から幼稚園は、子どもがみずからからだごとぶつかっていける体験的保育を実現するために、どうしたらよいか試行錯誤していた。子どもはからだを動かすことで、体験と知識を結びつけ、またことを思考の道具として身につけていく。いわば知識は、経験をへてこそ本物になる。

子どもたちにとっては、見せてもらえない教育はインチキでしかない——といきまいて畑を耕やし、野菜をつくって調理したり、試食したり、大工道具やナイフを設置して自由に、あらゆる素材に取りくめる配慮をしたりした。

ところが幼稚園はそう思つても、実際には、時間帯、教材、幼児数、保育者数、個人差、など保育における環境にいろんな限界がある。従つて思うことの何分の一もできないことになる。

しかしもし、幼児の数を六人か七人に分けたらどうだろうか。それにたっぷり時間をかけて、緻密に対応できれば、豊かな展開ができるのではないか——。

そんな絡みあいの中で生まれたのが、俗称「家庭幼稚園」である。「家庭幼稚園」の呼びかたは、七月の「お泊り幼稚園」に対応してつけた呼び名である。早朝の保育、真夜中の保育、真冬（夏）の保育とあるように、家庭にも幼稚園があってもいいのではないかという軽い気持だった。

家庭幼稚園のスタートは、グループわけからはじまる。大体のところは、園児名簿をみて、生年月日順に上から下から数えながら、六人のグループをつくっていくが、それだけでは困るグループもできるので、兄弟の数、家族構成、家の造り、性格、親の職業、地域性などを総合的に判断して、かたよらないようにして編成する。

六人のグループをつくるのは、だいたい男女同数にする、一人が欠席しても友達関係に大した影響がない、また実施の期間が九月から十月の毎週土曜日、六、七週間ということ、その長さにも合っているなどの理由である。

る。

こう考えてくれば、むずかしい話のようにもきこえるが、要は、「あなたのお子さんの友だちを、およそ五年に一回あなたの家庭に招いてください」ということなのである。

はじめの頃は、私の家は忙しい、赤ちゃんがいて手が離せない、これは体裁のよい週休二日制ではないか、実質的な月謝の値上げだ、園の仕事の肩代りか——という人もあったが、三年目からはむしろ親の方がこの試みを歓迎するようになり、いまは反対らしい発言をする人は一人もいない。

それは、この試みの結果のところでも述べるが、その効果が親にも子にも理解され、それなりに評価されているからであろうと自負している。

さて、家庭幼稚園を始めるにあたっては、およそ二週間前にオリエンテーションを行なう。そこでこの試みの目的、目標、内容、方法などを説明して、作成しておい

た幼児の組分け表を配り、親たちの顔合わせをする。やがて、グループに分かれて、親たちは実施の順番、内容の検討、配列、方法、費用などを話し合いによって決定していく。子どもたちの要求が加味されるのはいうまでもない。

第一回目を聞く前に、二回も三回も集まって話しあい、中には、茶菓子をさげて家庭を訪ねたり、園への報告書とは別に、グループでの「まわし報告ノート」をつくったりするところもある。

保育の内容は、はじめの頃とはずいぶん変化してきた。

十年前は、「手が虫歯になった」といわれたところで、「なにかを作る」ことに力点をおいていた。しかし数年後には、ものできぐあいより、それまでの過程や、その中における心のふれあいが大事だというようになり、その形は問わず、それぞれの家庭ができる範囲でできることをやるようにした。

Mさんは、赤ちゃんがいるのでできないといってきた

人であったが、結局はおむつを洗い、脱水して乾かし、とりこんで、折ること重ねること、そのうち赤ちゃんが泣くと、みんなの目の前でおむつをとりかえるという実演をやった。

「あなたたちだって、ついこの前まではこうしていたのよ……」と言いながらである。大好評であった。

Sさんは、川畔に子どもをつれていってジュズ玉を採り、おばあさんと手わけをして「おてだま」づくりをやった。もちろんできあがったらあざやかな模範演技つきである。ついでに、ジュズ玉のネックレス、ブレスレットもでき上った。

商店経営のHさんは、店の中をくまなく見せた。在庫品、ハカリ、レジスター……子どもにとっては目をみはるような経験だった。

Hさんは、子どもの靴と靴下の洗濯。

Nさんは、あまり園ではおしゃべりしない人であるが「トリ釜メシ」つくりの名人、Aさんのお父さんは年休をとって竹馬つくってくれた。

テントを張って、カレーライスをつくってキャンプをしたグループ、電話局や工場を見学したグループ、サイクリングや、マス釣りもあった。

Kさんは、団地の十二階に住んでいる利点を生かして紙飛行機をつくり、そこからとばした。おまけに風の流れたかたがわかったそうだ。

絵本のおみきかせ、料理、紙工作、虫とりなど、活動は毎年多彩であるが、民俗伝承的なあそびもかなり顔を出している。

報告書を見てみると、お父さんたちが積極的に参加していること、おじいさんや、おばあさんの協力を得ていること、地域の公民館、公園、諸機関はじめ川あそびや電車による遠出にいたるまで、地域の特殊性をよく利用していることがわかる。

今では、この保育の進行にならぬ不安を感じない。母親たちは予想以上の情熱と、専門家顔負けの配慮と子どもあつかいの技術にたけていた。

よしんばうまくいなくても、その報告書を見る限り、

「はじめる前は不安で仕方がなかった。年長組になったときから、家庭幼稚園のことが負担となって、どうしようもなかった。でも案ずるより生むは易しで、今になってみるとどうしてもっと早くやらなかったのかと思う。年長組だけでなく、年中組もあった方がよい。それも早ければ早いほどよい」

「こんど、もう一回やることがあれば、この次はもっとうまくやれると思う」

「子どもは、〇〇を教えてやろうとか、指導してやろうと、おとなの側で「かまえ」てしまうと、身をよけて逃げようとするが、いっしょに楽しもうという姿勢になると、ものすごくなついてくる」

「先生たちの毎日の苦勞を思わずにはおれなかった。その反面、子どもと接することの貴さもちよびりわかったような気がする」

など、それなりに充実し、また学習をしていることがよくわかる。

私は、十年来この試みを進めてきて、そのねらいや内容には変化があったことは認めるけれども、その効用は何だと質問されるならば、およそ次のように答えることができる。

本来なら、それは親の側からの効用と、子ども側からのそれと分けて考えなければならぬのであろうが、「子どもと共にあることの喜び」とある母親が言っているように、子どもによって体験した幸せや喜びを考えると、わけて考えるのはむしろ不自然にも思える。

その母親は、「子育てがわずらわしく、一日も早くそこから解放されたいとねがっていた。しかし子育ての真最中に、人としての幸せをつかむことができなければ、子育てが卒業したからといってみつかるものではないだろう」と報告書に述懐している。

そんなわけで、この試みは子どものための試みか、親たちのための試みかとただされるなら「どちらともいえない」といわざるを得ないように思う。

少なくとも、父母会や講演会で机をならべ、顔と顔を

合わせて、教えたり、話し合ったりするよりも、こうして子どもを介して、いっしょに汗を流し、からだごとで活動し、同じ目的にむかって同じ体験をくり返すことのほうが、はるかに理解は早く、通じあえるということは事実のようだ。

子どもたちは、他律的とはいえず、新しい仲間との思いもかけぬ交流が始まる時、新しい関係が家族ぐるみではじまる。今日兄弟の数が少なく、それも男だけとか女だけという場合も多い。従って、自分の家庭を「絶対的な家庭」と思っていた幼児が、いろんな家庭があり、いろんな生活様式、いろんな生活態度・構成があることをわかっていく意義は大きい。

わが家と同じように、よその冷蔵庫をあけたとたんピシリとやられたとか、うちではいいのに、よそではベッドの上で遊んでいたら叱られたとか、あの家には廊下があるとか、屋根裏があるとか、五右衛門風呂があるとか、初体験が続く。

祖父母のいる家庭、田畑のある家庭、職業によってか

わる家庭の姿を直接見てまわったのである。

このへんは親たちも同じである。Oさんの家には、開關以来はじめて異性の友だちがやってきた。わくわくしたのは母親の方だといった。

Nさんのうちで一番はりきったのは、おばあさんだったという。近所のおばあさんを招いて、いっしょに真綿をひいてざぶとんを、子どもたちに作らせた。

こうしてお母さんたちをはじめ、父親、祖父母たちが、長年語ってきたその経験や行動力を、閉鎖的なひとつの家庭にとじこめておくのではなく、ひろく社会に、なかんづく子どもたちに還元したのである。

今日、社会的に「地域が崩壊した」といわれるが、こうした試みは、地域のもつパワーを掘りおこしたという意味で意義があるのではないだろうか。

月曜日になると、子どもたちは家庭幼稚園で得た感動や、作品や、あそびをそのまま園にもちこんだ。そしてそこにまた新しい展開があったりする。

母親たちの変化もあげておきたい。もちろん、すべての人ではないが、親たちの中には、自分の価値観を絶対視して、無理やりその類型に子どもをはじめこもうとする人がある。そんな親たちにとって、家庭幼稚園は、わが子のありようを、友だちの中で実際に観察する格好の場となっている。比べることもできるし、知らなかった新しい側面も発見できるし、よさの再確認にもなる。

ある報告書には、

「これまで欠点だらけだと思っていたわが子が、案外しつかりしており、よく気もつくし、長所もたくさんあることに気がついた」

「わが核家族だけでは想像もできないような息子のはしやぎぶりを、啞然として見つめた」

「いろんな人がいておもしろかった。わが子もなかなかやるわいと思った」といっている。これらは、わが子を「絶対的な個」から「相対的な個」へ視点をかえることによって理解しえた感想ではないだろうか。子どもを見る目がかわったとか、視野が広がったとも、いえるよう

に思う。

母親たちの人間関係の拡がりも無視できない。いや応なしにあてがわれたグループではあるけれども、黙って進展しないのであるから、主体的に考え、決定し、行動しなければならぬ。協議も、意見の聴取も調整もしなければならぬ。そんな共同作業の中で仲間意識は育っていく。

この試みがきっかけになって、親戚つきあい以上の交際を深めている人もあるし、卒園後五年たっても六年たっても集まっているグループもある。また中には、子どもたちを招きあって宿泊させあっているところもある。

当地には航空自衛隊の基地があり、二、三年ごとに転勤する人が多い。自衛官でなくても、転居する人は意外と多いのであるが、そんな人は、深い交際を心がけても長つづきするわけがないので、心配ごとがあっても、相談したいことがあっても「黙っている」という。

転居はしないでも、人との交流に消極的な人もいるだろうが、ここでは子どものために意欲的、積極的に行動

する母親の姿が一般的である。そうせざるを得ないのである。

そうした親たちの充実感や、満足感が子どもたちにプラスに働くことは事実であろう。そういう影響力も期待はしているのだが――。

こうして書いてくると、やたらにプラスの面だけを強調してきたような気もしている。しかし、読者にはこの「家庭幼稚園」だけをもって園や、園と両親のかかわりについて即断されては困るのである。園は、この試みについてだけでなく、あらゆる行事や保育そのものについて、その目的や方針が理解され、親たちの理解が得られるように努力している。もし論じようとするれば、むしろそのへんのかかわりこそ大事なかもしれない。「家庭幼稚園の試み」といっても、わが園にとっては、単なる保育の一点にすぎないのだから。

(埼玉・狭山ひかり幼稚園)